
天短篇集

テンコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天短篇集

【著者名】

テンコウ

N6906V

【あらすじ】

短編童話集です。いままでの作品のリニューアル版などを随時掲載していきたいと思います。

「名も無き花の贈り物」

名も無き花の贈り物

その花は道端に咲いていた。

誰に愛でられることなく、ただ咲いていた。

夏になると真っ赤な花を咲かせるこの花に気づく人は誰もいなかつた。

それくらい小さくて、目立たない花だった。

しかし、ある年の夏のこと、花はひとりの少女と出会った。

少女は花を見つけると顔をぐっと近づけた。のぞき込むように花を見つめた少女は、思い立つたようにカバンからスケッチブックと色鉛筆を取り出した。

そして一心不乱にその花を描き始めた。

花は自分を描く人間がいることに驚いた。

（変わった少女だ。）

花は素直に思った。

その日からというもの、少女は毎日のように花を描きに来た。

少女が描くその花は生きる力に満ち溢れ、赤は燃えるように鮮やかだった。

少女はこの花をとても気に入っていた。

そしてそんな花に対する思い入れが絵に溢れていた。

ある日のこと、ひとりの男性が少女の脇を通り過ぎた。

男性は少女が必死に絵を描くさまを見てどんな絵を描いているのか知りたくなった。

「お嬢さん、何を描いているのかな？」

男性の問いかけに少女は満面の笑みで答えた。

「真っ赤なお花！！」

男性が見るとスケッチブックにはそれはそれは鮮やかな赤で彩られた可憐な花が描かれていた。

男性はその素朴だが力強く描かれた絵と、そして見るほどに愛しさを増すその花に深い感銘を受けた。

「お嬢さん、良かつたらその絵を一枚もらえないかな？」

少女は大きく頷くとスケッチブックから一枚ちぎつて男性に渡した。

男性は大いに喜ぶとその場を後にした。

そして数日後、少女の描いたその花の絵が脚光を浴びることになった。

男性は商店を営んでいた。

少女からもらった絵を額に入れ、店先に飾つたのだ。

すると、道行く人々はその絵の前で立ち止まり口々に賞賛の声を上げた。

またたく間にその噂は街に広がり、その絵と花は人々の知るところとなつたのである。

それからというもの、花は手厚く保護されるようになつた。

今まででは考えられない人間の態度に花は戸惑いつつも嬉しく思つていた。

（ああ、私は生まれてきて良かつた。）

花は生まれて初めて生きていることを嬉しく思つた。

（私を愛でてくれる人よ、ありがとう。）

少女をはじめ、自分を愛でてくれるすべての人には花は感謝した。

だが、幸せな日々は突如失われてしまう。

巨大な地震がこの地を襲い、人々から日常を奪い去ったのだ。
街は一夜にして廃墟と化した。

花を愛でた人々も姿を消した。

そして、花も瓦礫の下敷きになってしまっていた。

(ああ…神よ、なぜ貴方は私から幸せを奪うのですか?)

花は恨むように叫んだ。

花は再び孤独になった。

瓦礫の冷たさだけが花には伝わっていた。

(あの少女は無事なのだろうか?)

(あの男性は無事なのだろうか?)

(私を愛してくれた人々は?)

徐々に消えゆく命の炎を感じながら花は皆の無事を祈り続けた。

そしてその日から三日が経つた。

薄れゆく意識の中、花は人の声を聞いた。

「お花…潰れてる…」

今にも泣き出しそうな声の主はあの少女だった。

「ごめんね、ごめんね…」

少女は自分の罪であるかのように謝っている。

(よかつた、君は無事だつたんだね。)

花は心から喜んだ。

「よし、瓦礫をのけよう!!」

少女の後ろから男性の声も聞こえた。

見れば少女から絵をもらつた男性であった。

(ああ、貴方も無事だつたんだね。)

花は一人の無事を心から喜んだ。

しかし、花にはもう時間がなかつた。

根元から折れた茎は水を通すことができず、今までに枯れ果てようとしていたのである。

「だめだ、こんなに傷ついてたら手の施しようがない。」

男性の言葉は少女を更に悲しませた。

「お花さん、枯れちゃうの？」

少女はすがるように男性に詰め寄つた。

風前の灯火となつた花は、自分の為に泣く少女にどうしても伝えたかった。

だから生まれて始めて神に祈つた。

（神よ、私は今まさに貴方の元に召されようとしています。）

（ですからお願ひです。私のために涙する少女に一言伝えさせてください。）

花の切ない祈りは神の心を動かした。

神は一言だけ少女に伝えることを許したのだ。

花はゆっくりと少女に語りかけた。

（私のために涙を流す少女よ。）

花の問いかけに半信半疑で少女は花を見つめた。

花はゆっくりと、そして万感の想いを乗せその言葉を言った。

（ありがとう）

花はそう告げると天に召されていった。

少女は花の亡がらを抱きしめ、ただひたすらに泣いた。

そんな少女を見ていた全ての人と同じように涙していた。

震災はこの街に悲しみの雨を降らしていた。

絶望の闇が人々を包みこもうとしていた。

少女の一滴の涙が花を濡らしたとき、その奇跡は起こつた。

少女の手から一面に向けて無数の光がとび散った。

光が落ちた場所には燃えるように鮮やかな真っ赤な花が咲いた。

生きる力に満ち溢れた花が無数に咲き誇つていた。

少女は驚き、そして満面の笑みを浮かべた。

「お花さん、ありがとう！」

少女は天に向かい手を振つた。

「花は私たちに生きる希望を『えてくれたのだ。』

男性も天を見上げ涙を流した。

皆が流したその涙はまた新たな花を咲かせる、喜びの涙だった。

月日は経つた。

あの日、壊滅的な被害を受けたあの街は見事な復興を遂げた。

少女は大人になり、子供を授かつっていた。

「あ、お母さん見て！」

お母さんと呼ばれた女性はその指先をみて優しく呟いた。

「おかえりなさい。」

真っ赤な花が風に揺られて咲いていた。

「生命の歌」

僕はずっと暗闇にいた。

僕にとって暗闇は日常であり、当然のことだった。

だからそこが息苦しいとか、殺風景だとかそんな事を考えたことはなかつた。

僕はずつと何かを待っていたんだ。

それが何なのか知る由もなく、ただ漠然と何かが訪れるのを待っていた。

そこには何の理由もない。

だから希望や夢、欲望や苦しみ…

そんな感情を抱くことも、必要もなかつた。

ただ、無意味に時間だけが過ぎていた。

その何かは突然訪れた。

誰かに告げられた訳ではない。

ただ、躰が自然に動いていた。

僕はひたすらに上へ上へと地中を掘り進んだ。

しばらくすると土とは異なる感触が手に伝わってきた。

その感触を頼りに更に上へ上へと昇つていく。

すると今度は躰が熱くなつた。

僕は躰を固定して、これから起つてゐるであろう「何か」に備えた。

不意に躰に変化が起きた。

僕はゆっくりと躰を引き起こす。

すると唐突にいろいろな情報が頭に入つてくる。

僕には移動のための「羽」がある。

僕には食事をするための「口」がある。

そして僕は「鳴く」事ができる。

ひとつひとつの情報があまりにも衝撃的で、僕はしばらくは何もできなかつた。

どれほどの時間が経つたのだろう。

僕は目の前が急に明るくなつたことで我に返つた。

我に返つた僕は言葉を失つた。

深緑の木々…

色鮮やかな花々…

壮大な山々…

そして広大な空…

目に映る全ての物が美しく、神々しく思えた。

「なんて素晴らしい世界なんだ！－！」

僕は心から叫んだ。

僕は嬉しくなつて宙を舞つた。

その日から僕の第一の人生が始まつた。

木から木へと飛び周り、お腹いっぱい樹液を吸つた。

多くの仲間と出会つた。

多くの生き物にも出会つた。

そのなかには僕を食べようと襲つてくる生き物だつていた。

僕は必死に逃げた。

そしてまた仲間と共に声の限りに歌つた。

本当に楽しい日々だつた。

辛いことや悲しいことも経験した。

生きていることを実感できていたんだ。

だからこいつ思つたんだ。

「なんて幸せなんだろ。」

僕は生まられてきて本当によかつたと思つた。
生まれてこなければこんな幸せを得る事はできなかつたのだから。

僕は知つていた。

僕はもうすぐ死んでしまつと…

僕は今、地に落ちたまま動けずにいる。
もう羽は動かない。

足もからづじで動く程度だ。

このまま僕は動かなくなるのだろう。

走馬灯のように今日までの日々が思いめぐる。

もう一度、空を飛びたいな。
もう一度、お腹いっぱい樹液をすいしたいな。
もう一度、もう一度、もう一度…

嫌だ！

僕はまだ死にたくない！

僕は…まだ鳴けるのか？

「…ジ…」

僕は…まだ歌えるんだ！

僕は歌うぞ！

僕はまだ生きているんだ！

僕はまだ死んじやいないんだ！

この生命尽きるまで、僕は声の限りに歌うんだ！

まだだ！！

まだだ！！

僕は歌い続ける。

きっといつまでも歌い続けるよ。

生きている限り。

ずっと…ずっと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906v/>

天短篇集

2012年1月5日17時52分発行